作文に見る中国人学生の日本語観

江川清　米田正人（国立国語研究所）　　劉志明（神戸大学）

新プロ日本語研究班１では、「日本語観国際センサス」の準備作業の一環として、1995 年から、中国で日本語を専攻する学生、日本語を非専攻する学生、日系企業の従業員、一般市民などさまざまな人を対象に、準備調査を行った[i]。

そのうちの日本語専攻の学生対象の調査は、北京外国語大学と西安外国語学院の二つの大学で実施された[ii]。まず、１９９５年１月、北京外国語大学日本語学部の学生４３人を対象に、質問紙調査を実施した。その調査の結果を踏まえて、翌年１０月に、西安外国語学院日本語学部の学生を対象に、「作文調査」実施した。１５人の学生に、「私の日本語観」というテーマで、日本語で作文を書いてもらったわけである[iii]。

学生たちの作文のタイトルは「日本語について」、「日本語学習の体験について」、「日本語を学んで」、「私の日本語観」「私と日本語」、「日本語学習の体験について」[iv]などさまざまである。また、内容も、日本語学習の動機、日本語学習の方法・問題点など多くの方面にわたっている。以下は、作文の内容分析を中心に、日本語を専攻する学生の日本語観の構造を分析してみよう。

１．二つの調査方法に見る日本語学習動機の違い

学生の日本語学習動機を明らかにすることが、この調査の主な目的である。質問紙調査では、日本語学習目的に関連する調査項目を設けた。また、作文調査では、内容に関する規定をしなかったが、ほとんどの学生が自分の日本語学習動機に言及した。

質問紙調査では、「あなたが日本語を勉強した目的は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものをいくつでも選んでください。」という質問項目のもとに、１０の選択肢を用意した。調査では、大半の人が「仕事・研究上の必要があるため」と日本語は「将来性があるから」を選んだ。

日本語学習の動機

進学のため	10.3
いい職につけるから	41.0
留学したいため	17.9
日本の近代的知識を身につけるため	35.9
日本の文化を理解するため	48.7
仕事・研究上の必要があるため	61.5
将来性があるから	61.5
学びやすいから	2.6
趣味として	33.3
日本が好きだから	25.6

しかし、作文では、日本語学習の動機について、半分以上の人が「日本に興味があるから」をあげて、最も多い。ついで、「日本語に興味がある」である。質問紙調査でもっとも多くあげられた「仕事・研究上の必要があるため」と「将来性があるから」はほとんど言及されなかった。

質問紙調査と作文調査と違う結果が出た原因については、全国重点大学としての北京外国語大学の学生と、一般の地方大学としての西安外国語学院の学生の意識の差による影響があることが考えられるが、二つの調査方式の違いによるところが最も大きいと思われる。

作文では、多くの学生は、自分が最初に日本語を選んで勉強する理由について、具体的に説明してくれた。それによって、日本語学習を始める「時点」と「理由」が非常に明確になった。

それと比べて、質問紙調査では、「当初なぜ日本語を選んだのか」のよおうな時点に関する限定がないため、学生は、日本語の勉強を始めた時点の考えより、日本語を

何年も勉強したあとの現時点の考えで答える可能性がある。選択肢の設定の仕方次第で調査結果が異なるため、選択肢の作成には、関連の社会事象の実状についての大体の知識を持つことが必要である。しかし、調査票作成段階では、我々は中国における日本語教育の現状に対する理解は十分とはいえなかった。たとえば、作文や聴取調査を通じてはじめて、日本語学部の学生の大半は日本語学部に入るまで日本語をまったく勉強しなかったことがわかった。その意味で、われわれの調査の選択肢はかならずしも妥当なものとはいえない。調査票の中での「進学のため」、「いい職に就けるから」、「留学したいため」「学びやすいから」など４選択肢が作文でほとんど言及されなかったのに対して、作文に言及された「日本語に興味があるから」、「大学の事情」（たとえば、「英語に興味をもって大学に入ったが、英語を希望した学生が多かったので、英語学部には入れませんでした、やむをえず日本語学部を選んだんだ」）などの選択肢が設けられなかった。

社会事象、とくに社会意識に関する調査を行うとき、質問紙調査法は、もっとも広く行われる方法である。しかし、特定の対象の意識および千差万別な社会心理現象の把握について、質問紙調査という計量的調査方法だけは、一定の限界がある。今回の調査を通じて観じたのは、新しい分野での調査の場合、量的調査と同時に、質的調査によって、調査項目、選択肢の妥当性を検証し、新しい事実を発見することが、必要不可欠な作業であるということである。

２．作文に見る日本語学習の動機

作文の内容分析を通じて、学生の日本語学習動機は人により、大きく異なっているが、そのなかの共通点は、日本語を選ぶとき、日本語の重要性、将来性などより、むしろ日本や日本語に対する興味が大きく働いたことがわかる。

まず、日本文化に対する興味および日本の成功の原因を探求する好奇心は、多くの学生をこれまで無縁だった日本語を選ばせた最大の理由である。

「大学に入る前に、時々中国語版日本小説を読みました。日本のいろいろなことをよく知っていました。たとえば、日本の自然、歴史、文学などで、もちろん知りたいと思うことがいっぱいあります。たとえば、日本は世界で一番大きい債権国です、でも、どうしてそんな小さい国はそんな大きい成果をあげましたか。かえって、どうして中国はそんな大きい国はいまそんなに貧乏ですか。自分でよく考えて知りたいと思います。では、もし日本語ができなかったらわかることが難しいと思います。だから、その時から、日本語を勉強するつもりです」２年生、男性。

「世界はかつて日本から影響を受けました。それは戦争が原因ですが、今、また経済で絶えず世界に影響を与えているのです、それで、私は日本について研究したいと思います」２年生、女性。

「だんだんと身についた知識がのびるにつれて、日本は発達の国、テンポを強調する国だとかいうことがわかってきた。一つの選択に臨まなければならない時、思いきり憧れていた日本の神秘なベールを剥ぐため、日本語学部を選んだ」３年生、男性。

「私は日本の文化に興味を持っているから、大学に入って日本語を選びました。将来文化交流の仕事をしたいのです」２年生、女性。

その次に言及されたのは「日本語に興味をもつから」である（２割）。そのうち１人は、日本語の漫画や歌に接してから日本語に興味を持つようになった。「小さい時、日本語版の漫画を見たことがありました。その時、下の中国語の説明でわかりましたが、日本語がぜんぜんわかりませんでしたから、残念だと思いました。漫画の中には、上手な絵もあれば、おもしろい内容もありますから、その時から日本語に興味が生まれました。高校生の時、流行している歌の

中で一番好きなのは日本の歌でした。メロディーが明るくて快いので、のんびりしたい時にときどき日本の歌を聞きました。でも歌詞は日本語なので、わかりませんでした。また残念だと思いました。それで日本語ができればいいなあと思って、大学の入学試験の時、日本語学部を選ぶことにしました」。高校２年に一度日本語を学んだことがある学生は、「先生の喋った日本語から、日本語はリズムの歌のような言葉であるとわかりました。つまり、それから、日本語は言語として気に入りました」と述べた。

そのはかに、家族の影響で日本語に興味を持つようになる学生がいる。「どうして日本語を勉強するのかとよく聞かれる。その時、いつも興味を持っているからと答える。確かにそうである。初めて日本語に出会ったのはおばあちゃんから紹介されたものであった。おもしろそうだね、日本でも漢字があるの、けど、なぜ読み方が違うのなど」。

そして、学生の日本や日本語に対する強い関心は、メディアの影響によることがわかる（３割の人が言及した）。ある男子学生が大学に入って、英語以外の６つの言語の中から自分の専攻を選ぶとき、非常に悩んだ。その時、ちょうどテレビで「東京ラブストーリー」という日本のドラマが放送されていた。「その中の日本人たちの話し方とかおじぎの姿などを見て、私は強い印象を受けました。立派だなと思いながら日本語を勉強することにしました」と述べた。もう一人の学生は、「大学に入る前、日本語に対してちっとも知らないといっても過言ではなかった。ただ、ラジオとテレビのおかげで、日本の様子をだいたい知っていた。高校時代に、いくつかの日本映画を鑑賞した。それをきっかけに、一風変わった日本文化に心を惹かれてしまい、もっと深く日本のことが知りたいという気持ちが沸いてきた。その後、日本と関連がある本を目にすると、できるだけ買ったり借りたりして読んでいた。とうとう、私は高校を卒業した後、外国語学院に入って、日本語を勉強しようと決心した」と書いている。

３．日本語学習について

外国語大学で、日本語を勉強している学生は、総合大学で日本語を勉強する学生と比べて、日本語学習の環境はずっと恵まれているのはわかる。質問紙調査では、64%の人は、日本語学習条件は英語よりいい、あるいは英語と同じと答えた。作文では、３割の人は「学習環境はいい」と言及した。

日本語学習の難易度について、作文調査では、６割の人は、「日本語は難しい」と述べている。これを「笑って入り、泣いて出る」と表現する人さえいる。日本語は英語より難しいと指摘する人が少なくない。

日本語学習の具体的な難点について、作文では「ヒヤリング」、「発音」、「日本語漢字と中国漢字の意味の違い」（ともに27%）、「スピードは速い」（13%）が言及された。

「日本語の文章を読むのはやさしいと思いますが、難しいのはヒヤリングと会話であります。日本語はスピードが速かったり、約音がよく出たりするので、聞きにくいであります」というような意見が代表的である。

日本語は漢字を使っているので、学びやすいという先入観を持つ人は少なくない。しかし、作文の中で、多くの学生は、同じ漢字について、日本語の意味と中国語の意味の違いは、誤解を起こしやすく、むしろ日本語学習の落とし穴だと指摘した。

以上の難問を克服し、もっと早く日本語を上達させる方法について、「日本人留学生と交流し、会話を練習すること」は 33%、「日本の文化や社会、経済、歴史などを勉強、理解すること」27%、「NHK、日本の新聞など日本語メディアに接触」は 13%である。その中で、日本文化を理解することの重要性が多くの人に言及され、日本文化・社会を理解しないと、「日本語をすっ

かり理解できないし、うまく使えない」との意見は、日本語学習者の共通認識といえる。

---

[i] 調査結果の一部は、劉志明「中国における日本語の国際化」（『国際協力論集』第４巻第１号、神戸大学大学院国際協力研究科）などで紹介されている。

[ii] 中国における専門の外国語大学は、北京外国語大学、北京第二外国語大学（現旅遊学院）、上海外国語大学、大連外国語学院、西安外国語学院、四川外国語学院、天津外国語学院など７校ある。

[iii] 西安外国語学院は１９５２年設立され、現在、英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語、日本語など７つの学部を持っている。日本語学部は１９７８年に設立、現在の教師数は３１名、うち中国人教師２６名、日本人教師５名である。主な授業科目は、基礎日本語、高級日本語、ヒヤリング、多読、会話、翻訳、文法、日本文学作品選読、日本文学史、日本概況、新聞を読む、社交礼儀、古典文法、日本語ビデオ、日本語専門講座である。

[iv] 作文調査のもう一つの目的は、学生の書く能力を調べることでもあるので、本論での引用は原文のままとした。